

秀賞

憧憬

山形県山形市立第十中学校

3年 荒井 ひよ

私は、カッコいい人が好きです。凜としていて、何事にもまっすぐな気持ちをもって取り組める人はとてもカッコいいと思います。幸せなことに、私はカッコいい人たちに囲まれて生きてきました。その人たちに憧れて、私自身もカッコいい人になるためにたくさんのことに挑戦してきました。今までに経験した役職は挙げたらきりが無いほど多いです。しかし、それらを経験する上で苦悩したこともたくさんあります。例えば、人前に出て多くの人をまとめる立場になったとき、私の声を聴いてもらえるか不安で手足が震えました。裏方に回って仕切るときは、頑張りを誰にも見てもらえていないように感じ、行き場を失った悔しさが涙となって押し寄せました。しかし、それら以上に嬉しかったことがあります。それは、挑戦を一つするたびにカッコいい人との距離が縮まることです。少しずつ憧れに近づいていく感覚がたまらなく好きだから、どんな苦悩を抱えても挑戦し続けることができました。憧れる心は挑戦する原動力になるのだと私は思っています。だから、頑張るのをやめてしまおうだなんて思ったことは一度もありませんでした。

ところが、あることに私は気づきました。私の感覚がみんなとずれていることです。私は、誰もが憧れに近づくために必死なのだと思っていました。どうやら違うと気づいたきっかけは、友達との会話の中で生まれた何気ない一言でした。

「ひよちゃんって変わってるよね。」

言われた瞬間は固まってしまいました。一瞬で頭の中がすっからかんになったからです。褒められてはいないのだろうということしか理解できませんでした。その後は会話が途絶えてしまわぬよう、ひたすら話を合わせていました。しかし、その言葉は頭の中でずっと反芻して、正直会話どころではなかったです。

何気なく受けとった言葉なのに、それは数日間にわたって頭の中をぐるぐると駆け巡っていました。その数日間、私はどんな人が変わっていないと言われるのか、私の何がみんなと変わっているのかを知るべく、みんなを観察していました。すると、驚きました。頑張らないことを当たり前とする空気感の中で、劣らないように、されど秀でないように普通を目指している人が多くいることに気づいたからです。これが変わっていないと言われるのなら、私は確かに変わっています。そして、私はみんなのこの空気感をカッコいいとは思えません。

でした。だから、今までどおり私の感性を信じていこうと決心しました。

しかし、少数派に属していると気づいてから、以前よりも周りを気にするようになりました。かっこよくなるために少しでも背伸びをすると、一人だけ目立ってしまう気がして、落ち着きませんでした。「なんでそんなに必死になってんの」とでも言わんばかりの冷ややかな視線が気になってしかたなくなり、堂々としていられなくなりました。決心したことがどんどん揺らいでいくのが分かりました。

そんなとき、私はSNSで、とある言葉に出会います。『背伸びする人だけ、背が伸びていくんだ』という言葉です。この言葉を見つけたとき、私は大きな安堵感とあたたかさに包まれました。少数派であることを理由に私の感性を疑っていたけれど、決してひとりぼっちではなくて世界のどこかには仲間がいると思えたからです。憧れる心を持つから成長できると考える私を、肯定してもらえたように感じました。この言葉のおかげで、私は私の感性に自信を持てるようになりました。

未来を生きるあなたへ。自分の感性を信じられているでしょうか。確かに、私の感性は多数派ではないかもしれませんが。けれども、あなたを突き動かしてきたのは、いつだって言葉と憧れる心でしたよね。あたたかい言葉に何度も何度も励まされ、自分がかっこいいと感じたものに憧れて、夢中で追いかけてきたから今のあなたがいます。憧れる心がすべての原動力になるということは、あなたが一番よく知っているでしょう。多数派と少数派のどちらであるかということ以上に、あなたを肯定してくれるものがきっとあるはずです。自分の感性を信じて素直に生きたからこそ、大きく成長した過去だってあなたは持っています。だから少数派になることを恐れず、挑戦し続けてください。

そして、私はかっこいい私になるために、今日も背伸びしています。あなたがかっこいいと思える過去を創るために、今を、未来を必死に生きていきます。